

法政大学大学院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 哲学専攻 修士課程《社会人》	2025年度 春季
専門科目		

【Ⅰ】

《解答又は解答例》

受験者の知識、理解、考察、議論構築を総合的に問う論述問題であるため、一義的な解答例は示せない。出題の意図に沿った解答が求められる。

《出題の意図》

哲学に対する受験者の具体的な知識、理解、考察と、それらに基づく論理的な議論の構築力を見ることが狙いである。

【Ⅱ】

《解答又は解答例》

1) ログス

ギリシア語としては「話す」（もとは「集める」の意）の名詞形で、「言葉」やその同義語を表す。そこから語られる内容つまり「話」やさらにその「話」に認められるスジ、つまり「論理」を意味し、また数学では「尺度」「比例」「比率」等を意味する。さらに論理的に話す能力としての「理性」を意味する。そして世界、万有を支配する「理（ことわり）」、「法則」などを表す言葉にもなり、やがてギリシア哲学以外の思想・宗教にも使用されるようになる。

2) 三位一体論

三位一体とはキリスト教の特色ともいえる考えで、神は唯一の存在でありながら、そのうちには三つのペルソナ（位格）が理解され、それらが一つの神としての実体をなすとされる。その三つのペルソナとは「父・子・聖霊」であり、この三つは実体としては区別されず、ただそれぞれへの関係に即してのみ区別される。その関係とは、父から子が「発出」すること、そして父・子から聖霊が「発出」することである。またそれぞれのペルソナはその固有のはたらしも有しており、父は「主体となる」こと、子は「知性的働きを外へ表す」こと、聖霊は「意志的働きを外へ表す」ことがそれに当たる。それゆえ子と聖霊はこの世界に関わり、子はイエス・キリストとして人間の理想を体現し、聖霊は回心の導き手として人間に関わる。

3) 「われ思う、ゆえにわれあり」 Je pense, donc je suis.

デカルトが『方法序説』第四部で語った、あらゆる認識を疑った末に発見した第一に確実な真理のこと。真偽を疑いうるあらゆるもの（特に感覚的認識）を所謂「方法的懐疑」によって疑った結果、そのように疑っている（すなわち考えている）「私」の存在こそが最も確実な真理すなわち第一の原理であることをデカルトは発見した。この発見の特徴は「私」が考えるもの、すなわちその実在が懐疑に付される物体（身体）からは区別された精神であることを示した点にある。純粹精神としての「私」が最も明晰判明な真理として確立されたことにより、「私」を基点として万物の探究が可能になった。デカルトは「私」こそが哲学の第一原理であり、他の

法政大学大学院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 哲学専攻 修士課程《社会人》	2025年度 春季
専門科目		

あらゆる真理はその上に樹立されることを高らかに宣言し、それによって近世哲学が華々しく幕を開けたのである。

4) 真理条件 truth-condition

真理条件とは、ある平叙文が真となるための条件（その文がどんな場合に真となり、どんな場合に偽となるか）を与えるものである。一般に、文 **S** の真理条件は「文 **S** が真 iff. **P**」という形の同値文によって与えられる。たとえば、「明日晴れていれば遠足がある」という文の真理条件は、「明日晴れていれば遠足がある」は真 iff. 明日晴れていないかまたは明日遠足があるかいずれかだ」という形となる。意味に関する有力な考え方（真理条件的意味論）によれば、「ある文の意味を与える」とか「その文の意味を理解する」とは、当の文に関する真理条件を知ること存する。疑問文や命令文のようは平叙文以外の文に対しても、「どんな場合に **Yes** と答えられ、どんな場合に **No** と答えられるか」「どんな場合にその命令が従われ、どんな場合にその命令の違反が生じるか」という平叙文の真理条件に似た条件を与えることができる。

5) 形而上学

形而上は形而下と対をなす語であり、形而下のものはこの世の形あるものであるのに対して、形而上のものは形をもたないものである。形而上のものについての学問、すなわち形而上学は、西洋ではアリストテレスの『メタ・フィジカ』に由来し、自然学（フィジカ）を超えた（メタ）学、すなわち神学を意味する。カントは『純粋理性批判』で、形而上学の対象として、魂の不死、自由（絶対的自発性）、神の存在、という三つの理念を挙げている。

6) 疎外 alienation, Entfremdung

K・マルクスが『経済学・哲学草稿』において提示した、自らの労働の成果を受け取ることができない労働者のあり方を名指す批判的概念。マルクスは、自己意識が自己を他者のうちに外化させるというヘーゲルの議論や人間の類的本質が宗教のうちに対象化されるというフォイエルバッハの議論を引き継ぎ、それを労働者が置かれた社会関係の経済学的分析へと展開する。その際、労働者の労働が資本家の所有物となり、労働の産物や生産活動が人間主体にとって疎遠な存在となってしまう「疎外」の事態が批判的に明らかにされる。ここからマルクスは、こうした自己疎外の止揚として、社会の変革を志向する。

7) 先駆的決意性 vorlaufende Entschlossenheit

ハイデガーの『存在と時間』における現存在の分析において、現存在の本来性というあり方を規定する概念。現存在は、自分に開かれている可能性のどれか一つを選ぶさい、ほかの可能性をも選べるわけではない。またそのような可能性が開かれる根拠である自分の存在を自分で置いたわけではない。このことを指して、現存在は自分の非力さの非力な根拠であるとされ、このようなあり方を自覚的に引き受けようとする態度が決意性と呼ばれる。この決意性は、死

法政大学大学院
入学試験 解答又は解答例、出題の意図

試験科目	人文科学研究科 哲学専攻 修士課程《社会人》	2025年度 春季
専門科目		

への先駆を通じて自分の有限性をも自覚するとき、その趣旨を貫徹できるとされる。このようなあり方が先駆的決意性と呼ばれる。

8) 公理と定理 axiom and theorem

公理とは、何も前提をおくことなく成り立つとする命題のこと。定理とは、公理を含めて既に成り立つことが示されたひとつあるいは複数の命題に対して推論規則を適用して得られる命題のこと。

9) 応用倫理学 applied ethics

応用倫理学は、安楽死・尊厳死のような医療問題、地球温暖化のような環境問題、インターネットに関連する情報問題など、現代社会で生じている新しい課題を考察する倫理学の領域である。一般的な人の行為を対象に、いかに行為しいかに生きるべきか、何が善で何が悪かを考える規範倫理学の理論を応用しながら、科学技術や産業の発展などに伴って発生したこれらの課題にいかに対処し、どのように解決を図るべきか、その社会的解決を実践的に考えるところに特徴がある。

10) 禁止と侵犯

禁止とは、人間社会の発展に伴い、動物的な自然状態から脱するために形成されてきた理性的な規範（例えば親族間の婚姻禁止など）を意味する。この禁止の規範を守ることが人間社会は全体として発達してきたが、それを破ることで理性の限界を突破し、理性を超えた自然状態に帰還しようとするのが侵犯である。侵犯はかつて理性によって否定して得た世界をさらに否定するという二重否定を意味し、それによって理性を超えた神秘性ないし神性に到達しようとする。その一つの試みが、バタイユの言うエロティスムや死の意識である。エロティスムと死の意識は共にわれわれにとって、理性と精神の限界を超えた領域に達するための内的体験の重要な契機となるものである。

《出題の意図》

哲学の重要事項に関する基本的な理解がどの程度あるか、基礎的な用語・概念の説明力がどの程度あるかを問うものである。